

春季企画 / 連続シンポジウム

先住民という言葉に内実を与えるために

シンポジウム 伝統は近代を変えることができるか——「野生の思考」の挑戦

司 会：渡辺 公三（立命館大学）
パネラー：池谷 和信（国立民族学博物館）
岩崎・グッドマン まさみ（北海学園大学）
小長谷 有紀（国立民族学博物館）
コメンテーター：大村 敬一（大阪大学）
遠藤 彰（立命館大学）
スチュアート ヘンリ（放送大学）
春山 貴子（立命館大学・院生）

日時：5月22日（土）13:00 - 17:30

シンポジウム 先住民の権利と法——近代の力を逆手にとる

司 会：崎山 政毅（立命館大学）
パネラー：太田 昌国（現代企画室）
手島 武雅（九州女子大学）
大村 敬一（大阪大学）

日時：5月23日（日）14:00 - 19:00

シンポジウム 国語学とアイヌ語学の分岐点——金田一京助と知里幸恵

司 会：西 成彦（立命館大学）
パネラー：丸山 隆司（藤女子大学）
安田 敏朗（一橋大学大学院）
佐藤=ロスベアグ・ナナ（立命館大学・院生）

日時：5月30日（日）12:00 - 16:00

シンポジウム 同時代人としての知里幸恵と宮沢賢治

司 会：西 成彦（立命館大学）
パネラー：池澤 夏樹（作家）
秋枝 美保（福山大学）
坪井 秀人（名古屋大学大学院）

日時：6月11日（金）16:15 - 19:45

会場：シンポジウム ～ アカデメイア立命 21 K209 会議室
シンポジウム 創思館カンファレンスルーム

「先住民という言葉に内実を与えるために」

企画にあたって

国際言語文化研究所ではこれまで「国民国家と多文化社会」と題して、連続講座を企画してきました。そのとき、先住民族の同化という問題は、地球上のいかなる地域をとりあげた場合にも避けては通れない課題でした。今回は、5月15日から6月13日まで（月曜日休館）、国際平和ミュージアムで開かれる《銀のしずく/shirokani pe 降る降る/ran ran —— 知里幸恵『アイヌ神謡集』の世界》展と連携した形で、4回のシンポジウムを企画しました。

知里幸恵は日本の先住民族であるアイヌ民族の血を受けて、1903年に生まれ、昨年ちょうど生誕100年にあたりました。その後、日本の同化教育を受けつつ、豊かなアイヌの口頭伝承につつまれて成長した彼女は、そのバイリンガルな才能を買われ、言語学者金田一京助の求めに応じて『アイヌ神謡集』（1923）を完成させます。アイヌ語をローマ字表記し、それに日本語訳を添えた対訳書です。このような書物があらわされることじたいが、すでに先住民文化が大きく損なわれつつある当時の時代状況の反映でした。しかし、この書を編む中で、知里幸恵は先住民族の怒りをふつつつと感じるようになったのです。『アイヌ神謡集』は、失われた先住民文化の墓碑銘として読むのではなく、一女性の抵抗の記録として読むことが重要でしょう。

知里幸恵が生まれて、『アイヌ神謡集』の完成をみるまもなく亡くなって、今にいたる百年という時間は、アイヌ語やアイヌ文化がとにかえしがつかないところまで衰えた百年でありましたが、同時に、先住民族の権利をめぐる思考や政策がおどろくべき勢いで活発化した百年でもあったことにも目を向けなければならないでしょう。本企画では先住民文化の後退と先住民権の前面化をひとつの現象として批判的にふりかえり、いまからでも遅すぎるということはありません、先住民族と非先住民族との共生可能性について考える契機としたいと思います。

なお、この企画の具体化にあたっては、大学院先端総合学術研究科と立命館大学人文学会の協力を得たことを付け加えます。

